

第二回スポーツ救急サミット 報告

今回は、座長のアスレティックトレーナーの立場から国際武道大学 教授 山本利春先生、救急救命医の立場から、国士舘大学大学院救急システム研究科 田中秀治先生の進行により、「脊柱外傷その2・頸椎損傷の対応～教育方法とスキルの持続性について議論する～」をテーマに開催いたしました。



シンポジウムについて

まず初めに、アメリカからテキサス A&M 大学 コーパスクリスティー校キネシオロジー学部 阿部さゆり先生にオープニングプレゼンテーションとしてご登壇いただきました（衛生中継）。阿部先生は現在月間トレーニングジャーナル(Book House HD)で、「米国アスレティックトレーニング教育現場の今」を連載されており、その記事をきっかけにNATA-ATCを目指す学生が学ぶ救急法の教育(CAATE認定アスレティックトレーニング教育プログラム)における救急法教育 をご紹介いただきました。特に Learning Over Time（反復教育）がなされており、理論と実践を繰り返しながら最上級生は下級生に教育できるまで力をつけていきます。特に阿部先生の大学では一年に一度プログラムに所属する AT 学生を対象に救急ケアワークショップがオリジナルで行われており、大学4年生が1～3年生を指導、教育するという場が設けられているそうです。



NPO 法人スポーツセーフティジャパン 代表理事 佐保 豊先生には、EAP(Emergency Action Plan 緊急時対応計画) の重要性とその組み立て方のご紹介、エビデンスベースによる頸椎外傷の救急対応に関する技術として NATA position statement にある 8人ログリフト、5人ログリフトの方法、うつ伏せ時のログロールプルの方法をサミット後半の実技の時間も含めご講義いただきました。こ

の指針も5年毎に改定されており、2017年新たに公表されるとのこと。また、先生はトレーナーとしてアイスホッケーのフィールドをお持ちで、氷上で救急車が入れ込めない場合、低体温の二次的障害に関する危険性に対応について、さらにEAPの普及活動もされており、現場の指導者に興味を持っていただくための苦難などお話しいただきました。

国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 講師 高橋 宏幸先生には、救急のプロフェッショナルである救急救命士の教育について、また「JPTEC ファーストレスポnderコース」～病院前救護活動についてお話しいただきました。PTD: Preventable Trauma Death (これまでの外傷に関する研究から、容態の悪化を防ぐ適切な救護法がとられていれば、回避することができた外傷死をPTDという)や、また実際に頸椎損傷が疑われる場合のSMR: Spinal Motion Restriction (脊椎運動制限)の判断についてのお話しいただきました。また、先生自身がエデュケーターである一般社団法人 JPTEC (Japan Prehospital Trauma Evaluation and Care) 協議会のファーストレスポnder (FR) コース、(必ずしも医療従事資格をもたないFRが、重症の外傷傷病者に接触してから救急隊などに引き継ぐまでの対応を、JPTEC (病院前救護) の活動理念に沿って学ぶコース)についてご紹介いただきました。

流通経済大学スポーツ健康学部 教授 山田 睦雄先生からは、頭頸部外傷の対応について、先進的にプログラムが構築されているWorld Rugbyの取り組みをご紹介いただきました。先生ご自身がエデュケーターとしてご指導されているPrehospital course in Sports (フィールドでの救急対応)は、3段階の講習となっており、Level 1はコーチ、指導者、親、レフリー、その他現場でのファーストエイドに興味がる方向けのPre First Aid in Rugby / Sport (FAIR/FAIS)、Level 2は医師、歯科医師、看護師、ピッチサイドの医務を行う理学療法士、アスレティックトレーナー、スポーツリハビリに従事する療法士向けのImmediate Care in Rugby/ Sport (ICIR/ICIS)、Level 3は医師、看護師、代表帯同の理学療法士・アスレティックトレーナーを対象にAdvanced Immediate Care in Rugby/ Sport (AICIR/ AICIS)講習が行われているそうです。2019年ラグビーW杯に向けて有資格者の増員を目指す御尽力されております。



慶應義塾大学ラグビー部 S&C ディレクター 太田千尋先生からは、日本体育協会公認アスレティックトレーナーの救急法に関するカリキュラム例や養成講習で行われている統計部外傷の対応実践や

シミュレーションの紹介、現場の課題を考慮しラグビーチームにおける EPA の実際とスキル担保のために実践している毎週行っている学生トレーナーの練習の内容など紹介されました。



座長の田中先生からは、スポーツ救急への課題と提言として、研究に基づき体位変換や固定をする際の手技不足や機材によるリスクをご紹介いただき、医師や救命士ではなくトレーナーや指導者が緊急時対応をする場合の法的問題と今後整備する課題について提言いただきました。

スキルトレーニング

佐保先生のご指導のもと、ログリフトの方法を受講者の方々が実践されました。また高橋先生や田中先生から、胸ストラップは胸部腹部に止めると呼吸を妨げるため、より腋窩に近い部分で止めることが望ましいなどより細かい点の方法をご指導いただきました。



今回の第2回スポーツ救急サミットでは、第1回に引き続き、研究と現場、医師やトレーナーの垣根を越えて一つのスポーツ現場で起こりうる重篤障害の一つ頸椎外傷の対応について、議論が交わされ個人あるいは、スポーツ全体に問題提起されるような非常に濃い内容となりました。この内容詳細は、改めて関係雑誌等を通じて、広く皆様にご報告いたしたいと思っております。

【お詫び】 ご参加者の皆様へ 会において途中アメリカとの通信不慮や、進行が予定通りに進まない部分がありましたことをこの場をお借りしてお詫び申し上げます。

【御礼】

今回、開催にあたり多大なご協力を頂きました法政大学 伊藤マモル先生 泉重樹先生 法政大学 学生トレーナーの皆様、法政大学 学生ボランティアの皆様、株式会社クレーマージャパン様に厚く御礼申し上げます。